様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　21　年　3　月　31　日現在

研究種目：若手研究（B）
研究期間：2006～2008
課題番号：１８７３０４５１
研究課題名（和文）　アタッチメントの投影的測定方法開発に関する基礎的研究

研究課題名（英文）　A newly-developed projective method assessing adult attachment in Japan

研究代表者
北川　恵（KITAGAWA MEGUMI）
甲南大学・文学部・准教授
研究者番号：９０３０９３６０

研究成果の概要：アタッチメントの投影的測定方法（PARS）を開発し、成人の PARS の結果と既存のアタッチメント測定方法の結果を比較した。自覚的な側面を測る日本語版 ECR との関連より、無自覚的な内的作業モデルの働きも捉える AAI との関連が多く認められたことから、防衛的な情報処理過程も捉えうる成人アタッチメント測定法としての PARS の妥当性が認められた。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2006 年度	700,000	0	700,000
2007 年度	700,000	0	700,000
2008 年度	200,000	60,000	260,000
年度			
年度			
総　計	1,600,000	60,000	1,660,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：心理学・臨床心理学
キーワード：アタッチメント、投影的想定方法、親子状況ピクチャー（PARS）、
成人アタッチメントスタイル尺度（日本語版 ECR）、
成人アタッチメント面接（AAI）、洞察力アセスメント（IA）

１．研究開始当初の背景

アタッチメント対象との具体的・主観的な相互作用体験を通して構築された表象モデルによって、対人場面での出来事の知覚・未来の予想・行動の計画がなされるという「内的作業モデル（以下、IWM）」の考え方は、情緒的対人情報処理の個人差理解のための有効な枠組みを与えてくれるが、それについての測定方法の開発が課題となっていた。

成人のアタッチメント測定方法としては、アタッチメントの記憶にまつわる表象の質を面接内容や語り方によって測定・分類する「成人アタッチメント面接（以下、AAI）」がもっとも信頼性・妥当性が高く、欧米の実証研究では広く用いられている手法であるが、特に日本においては、認定コーダーが少なく、研究上利用しにくい。質問紙法は利用しやすく、成人アタッチメント尺度は日本語版 ECR として日本で標準化もされているが、AAI と質問紙では IWM の異なる側面を測定している。AAI では、親子関係に焦点化し、IWM の防衛的な情報処理過程も含めた心的状態

を測定している。質問紙では、恋人や親友との関係に焦点化し、回答者が自覚する自己評定結果を扱っている。そこで、AAI より簡便で実施上の負担が少ない手法でありかつ、IWM の無意識的な情報処理過程にも迫りうる測定方法の開発が必要と考えた。

２．研究の目的

本研究の目的は、アタッチメントの個人差を、投影刺激画への物語作成反応から分析する新たな測定法を開発することであった。AAI（面接法）も日本語版 ECR（質問紙法）も、対象者自身のアタッチメント関係に直接焦点を向けている。一方、自身に直接焦点化しない間接素材への情報処理にも、アタッチメントを活性化するような刺激であるなら、IWM が作用すると思われる。こうした投影的手法は、自身に直接焦点化しないためプライバシーに立ち入らず実施できる利点があり、無意識的な IWM の情報処理過程にも迫りうるものと考えた。そこで、アタッチメントを活性化するような日常的でストレスフルな刺激画（親子状況ピクチャー、以下 PARS）を作成すること、これへの自由な物語作成を対象者に求め、反応を分析する手法を開発すること、妥当性検証のために標準化された既存の測度（AAI、日本語版 ECR）との関連を検討することを目的とした。

また、養育者においては、自分の子どもの心をいかに読み取るかについての個人差が、PARS での反応とどう関連するかを検討したいと考えた。そこで、子どもの立場に立って、子どもの心的状態を洞察できる養育者の能力を測定する洞察力アセスメント（IA）を習得し、これと PARS との関連を検討したいと考えた。

３．研究の方法

(1)対象者（協力者）

①大学生・短大生。PARS への協力者は 104 名（男性 28 名、女性 76 名、平均年齢 19.76 歳、SD＝0.77）、日本語版 ECR への協力者は 90 名（男性 25 名、女性 65 名、平均年齢 19.31 歳、SD＝0.76）であり、PARS と日本語版 ECR 両方の協力者は 71 名（男性 19 名、女性 52 名）であった。PARS への協力者のうちの 26 名（男性 12 名、女性 14 名）が AAI に参加した。

②乳幼児を育児中の養育者。PARS への協力者は 84 名（男性 24 名、女性 60 名、平均年齢 34.26 歳、SD＝4.59）であった。AAI ならびに IA への協力者は若干名であったため、今回の分析では養育者の AAI ならびに IA による結果は含めないこととした。

(2)測度

①日本語版 ECR

26 項目、7 件法。因子分析の結果、中尾・加藤（2004）と同様の“親密性の回避”（17 項目）と、“見捨てられ不安”（9 項目）の 2 因子が抽出された。回避得点（M=3.22、SD=1.05）、不安得点（M=3.97、SD=1.26）いずれも性差は認められなかった。

②AAI

大学生・短大生 26 名に行った面接の逐語記録に基づき、日本人 AAI 認定コーダー2 名（北川恵、数井みゆき）で分類を行った。5 名については、インタビューでの質問が不十分であったなどの理由により無効データと判断し、分析から除外した。残る 21 名のうち、“安定自律型（F)”が 13 名（男性 6 名、女性 7 名)、“アタッチメント軽視型（Ds)”が 7 名（男性 3 名、女性 4 名)、“未解決型／アタッチメント軽視型（U/Ds)”が 1 名（男性 1 名）であった。“とらわれ型（E)”が 0 名であり、未解決型も 1 名であったため、これらのカテゴリーは分析に含めず、安定自律型 13 名とアタッチメント軽視型（未解決／アタッチメント軽視型を含めて）8 名の結果を比較した。

③PARS 改訂版

PARS 初版（久保（北川)、2000）以後、欧米で開発途上のアタッチメント投影測度に関する最近の研究動向を踏まえ、刺激画をいくつか改定した。アタッチメントを活性化するようなストレス場面であり、日本文化で起こりがちな状況である 8 場面を刺激画とした（表１、図１)。自己記入による質問紙形式とし、表紙（フェイスシート）に教示、続く 2 枚目以降に、A4 用紙の上半分に刺激画を印刷し、下半分に、「絵の状況、登場人物の気持ち、お話の続き」を自由記述できるスペースを用意した。最後に、自身が作成した物語の特徴や、それと実際の経験との関連を内省的に振り返るための質問を設定した。

表 1. PARS の 8 場面

場面１．父親による授乳
場面２．母親の後追い
場面３．子のお絵かきを遠目に見る母親
場面４．階段から落ちる子どもと父親
場面５．道端に座り込んで駄々をこねる子どもと母親
場面６．入院中のベッドから母親に手を伸ばす子ども
場面７．１人でいる子どもが地震に遭遇
場面８．両親の帰宅と出迎える子ども

図１．PARS 場面１の刺激画

PARS の反応は以下の手順で分析した。まず、各刺激画への反応を、状況設定、大人からの発信、子どもからの発信、物語の展開の５領域について、計 48～52 カテゴリー（刺激画により異なる）からなる分類基準に従って評定した。その評定値を、数量化Ⅲ類を用いてまとめると、大きく３つの反応パターンが認められた。

(a) 葛藤や苦痛の表出が少ない反応パターン
(b) 子どもは要求を表出し、大人がそれにこたえる反応パターン
(c) 葛藤や苦痛が刺激画に妥当な程度よりも強く表出される反応パターン

(3)手続き
PARS と日本語版 ECR とは、１～2 か月の間隔をあけて、集団法で行った。その後、協力を申し出てくれた人に対して、個別で AAI を行った。

４．研究成果
(1)PARS の性差と年代差
①全体的な結果
養育者は性差が少なく、典型的な反応パターンである(b)パターンが多く認められた。大学生・短大生においては、男性が女性より、非典型的な反応パターンである(a)パターンや(c)パターンが多かった。

②大学生における性差
男性は、
・父子場面刺激画において、男性の方が強い葛藤を表現する反応が多かった（場面１：$\chi 2=12.25$, df=2, p<.01、場面４：フィッシャー直接確率法 p<.01）。
→この結果より、男性では、伝統的性役割観を背景とした、父親が子どもに関わることへの抵抗や戸惑いの影響があるのではないかと考えた。

・場面２と６で、男性は分離不安を表現する反応が少なかった（場面２：$\chi 2=7.15$, df=2, p<.05、場面６：$\chi 2=13.66$, df=2, p<.01）。
・場面７で、子どもが独力で地震への恐怖に対処する反応が男性に多かった（$\chi 2=6.03$, df=2, p<.05）。
→この結果より、大学生・短大生の男性は、「男の子は強くないとならない、泣いてはいけない」といった伝統的性役割観の影響を受けていると考えた。一方、養育者である男性は、現実の育児経験から、子どもが泣いて助けを求めることを実感しているため、養育者の場合は性差が少なかったと考えた。

(2)PARS と日本語版 ECR との関連
投影法である PARS の結果と、質問紙である日本語版 ECR との関連は限られた範囲であった。
・PARS 場面１で、大人が子どもに肯定的な感情を表現する反応をした者は、日本語版 ECR で“見捨てられ不安”の得点が低かった（$F(2,64)=4.64$, p<.05）。
・PARS 場面８で、子どもが怒りやさみしさを訴える反応をした者は、日本語版 ECR で“親密性の回避”の得点が高かった（$F(2,69)=3.17$, p<.05）。
→このように限られた関連しか認めらなかったことから、PARS と日本語版 ECR とでは、アタッチメントの異なる側面を測定していると考えた。

(3)PARS と AAI との関連
AAI によるアタッチメント軽視型は、安定自律型と比べて、以下の特徴が認められた。
・PARS において、典型的な反応パターンである(b)パターンに分類されることが少なかった。
・場面２でのみ、葛藤の表出が少ない(a)反応パターンが多かった（表２）。
・ほとんどの場面（場面１，３，４，５，６）では、葛藤や苦痛を強く表出する（c）反応パターンが多かった。特に、PARS に描かれた養育者への不信感を表出した反応が多かった（表２）
→この結果から、自身のアタッチメント体験を直接問われる AAI では「理想化（養育者を抽象的なレベルでは肯定的に語るが、具体的なエピソード記憶でこれを裏付けることができなかったり、時に矛盾するような否定的なエピソードが語られたりする）」という防衛を用いて語るという特徴が認められたアタッチメント軽視型の者は、投影刺激画である PARS に物語作成反応をする際に、否定的な養育者表象をそのまま投影しやすのではないかと考えた。

表２．AAI でのアタッチメント軽視型（Ds）に顕著であった PARS での反応の特徴

＜場面１＞
・子どもが不満を表出

（大学生・短大生全体：6%、Ds：25%）
・父親が子どもの世話をすることへの不安や疲れを示す
（大学生・短大生全体：22%、Ds：50%）
・葛藤やストレスが解決しないままの展開
（大学生・短大生全体：14%、Ds：43%）
＜場面２＞
・母親との分離場面ではなく、母親と出会う場面であると状況を理解する
（大学生・短大生全体：28%、Ds：50%）
・子どもは母親と出会えた喜びを表出する
（大学生・短大生全体：31%、Ds：43%）
＜場面３＞
・母親は子どもを心配し、母親の意向を子どもに押し付ける
（大学生・短大生全体：36%、Ds：57%）
・母親の心配が的中し、子どもが母親にしかられる結末を示す
（大学生・短大生全体：34%、Ds：63%）
＜場面４＞
・父親が、故意、あるいはうっかりと子どもを階段から落とす
（大学生・短大生全体：14%、Ds：43%）
＜場面５＞
・母親は子どもの欲求に従うか拒絶するかを迷ったり、傍観者的に子どもを眺めたりする
（大学生・短大生全体：12%、Ds：38%）
・母親が子どもの欲求に屈し、子どもは欲しい物を得て満足する
（大学生・短大生全体：29%、Ds：57%）
＜場面６＞
母親は子どもを心配し、母親の意向を子どもに押し付ける
（大学生・短大生全体：31%、Ds：50%）

以上の結果より、成人のアタッチメントを投影的手法で測定することの妥当性、特に、質問紙で測るような意識的・自覚的な側面だけでなく、AAI で捉えるような無意識的・無自覚的な表象（IWM）も捉えうることが認められた。

研究の背景にも述べたとおり、日本でアタッチメント研究をしようとする際、研究者が比較的容易に使用でき、IWM の無意識的な情報処理過程も測りうる測定方法が得にくい現状である。PARS の成果を発表したことにより、国内のアタッチメント研究者から問い合わせが複数あり、これを用いた研究が国内で展開し始めている（亀井、2006；田井、2009 など）。さらに、国際学会（世界乳幼児精神保健学会,2008）での発表（発表可否の審査有り）でも発表の機会を持て、海外の研究者（D.,Oppenheim など）からの建設的なコメントも受けた。

今後の展望としては、対象者を 50 名以上にして、AAI との関連を検討するべきであるとの指摘を受けて、大学生・短大生に対象を定めて追加データを収集し始めているところである。これらを含めた結果を、査読付きの学会誌に報告する予定である。その結果を踏まえて、養育者データをさらに収集し、比較検討することが今後の課題である。また、臨床的使用の目的のために、この刺激画を利用できる可能性についても海外の臨床実践家（B.,Powell など）から指摘を受けた。事例に則した対象理解のための一つのツールとして PARS を活用していくことの方法と有効性についても、今後検討していきたい。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）
①北川恵　アタッチメント投影刺激画の作成と大学・短大生の反応傾向、四天王寺国際仏教大学紀要、査読有、45 巻、2008 年、pp.211-222

〔学会発表〕（計４件）
① Megumi Kitagawa, Hiromi Matsuura, Miyuki Kazui, Yuko Motoshima A Newly-Developed Projective Method Assessing Adult Attachment in Japan: Reliability Examined by Relations with AAI and the Japanese Version of ECR. World Association for Infant Mental Health, 11th World Congress、2008.8.2、パシフィコ横浜

②北川恵・松浦ひろみ　アタッチメントの投影的測定方法開発に関する基礎的研究：成人データからの反応パターンの抽出、日本発達心理学会第 19 回大会、2008.3.20、大阪国際会議場

③北川恵　アタッチメントの投影的測定方法開発に関する基礎的研究：大学生データについて、成人愛着スタイル尺度（日本語版 ECR）との関連についての検討、日本心理学会第 71 回大会、2007.9.19、東洋大学

④北川恵　シンポジウム「親子関係における養育者の特徴に迫る視点」話題提供④ insightful assessment(IA)と実証研究、日本発達心理学会第 18 回大会、2007.3.25、大宮ソニックシティ

６．研究組織
(1)研究代表者
北川恵　（KITAGAWA　MEGUMI）
甲南大学・文学部・教授
研究者番号：９０３０９３６０